

深層格 と パースペクティヴ

笠 井 勝 子

1. 序

格といえば、英語では代名詞の主格・目的格・所有格が、先ず頭に浮かぶ。それぞれの格は、決まった形態と機能を持っていて、I met him in his office. の中で、I が him や his と入れかわることはない。これが、一般に英語で考えられている格である。

Fillmore が提唱した深層格は、代名詞を含めて、文中で名詞の働きをする Noun Phrase (以下 NP) が動詞に対してもつ関係をさしている。しかし、この「動詞に対する関係」は、ふつう考えられる主語や目的語の関係を、指すのではない。主語や目的語は統語上の関係である。次の例で、(1)の文の主語は John であるが、(2)では John を主語とは言わない。

(1) John opened the door.

(2) The door was opened by John.

(1)(2)に見る John は、どちらもドアを開ける動作の遂行者である。次の例文で、this key には、統語上、文の主語(3)と、主語でない(4)のちがいはあるが、どちらの場合も、鍵はドアを開ける道具である。

(3) This key opened the door.

(4) John opened the door with this key.

John と this key は、その統語上の機能（主語であるかどうか）に関わりなく、動詞 open に対する意味上の関係は変わらない。そのような、名詞の動詞に対する関係を、格関係という。(1)～(4)の John, this key, the door の格は、それぞれ、Agent, Instrumental, Objective である。

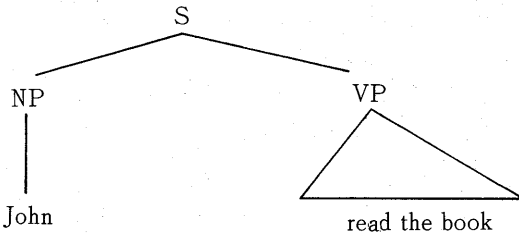
このような深層格に基づいて説明できることがらが、いくつかある。
その一つに文接続によって生ずる非文がある。

2. 文接続と深層格

John and Mary read book は、John read the book と Mary read the book の背後にある構造を組合わせて導き出すのが、文接続の考え方である。

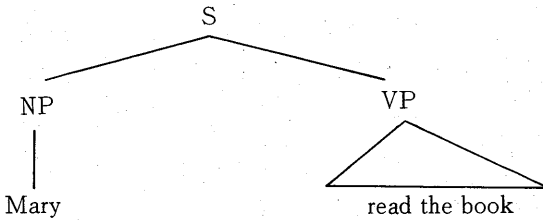
John read the book は、

(5)

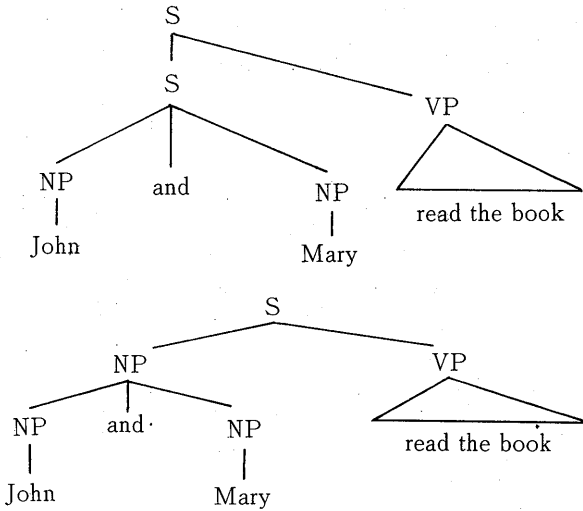


Mary read the book は、

(6)



(5)(6)に共通の部分 VP を、S の上に別の新しい S を立てて付ける①ことにより、二つの文の深層構造から、等位接続詞を持つ文を導びく。



この文接続によると、John opened the door と This key opened the door の基底構造から *John and this key opened the door を生じる。この文は非文である。その理由を、深層格によれば次のように説明することができる。

(7) 深層格の異なるものどうしを接続することはできない。

同じ VP をもつ主語どうしとはいっても、John は Agent, this key は Instrumental, と動詞 open に対する格関係は、同じでない。格関係が同じでないものを等位接続することはできない、ということである。

3. 日本語と英語の基底文にみる対称性

変形文法の句構造規則では、文を(6)のように NP と VP に書き換える。しかし Fillmore は文を(7)のように先づ Modality と Proposition に書き換える。

(6) S \longrightarrow NP + VP

(7) S \longrightarrow Modality + Proposition

(7)では、文は Modality、即ち様相・否定・時制・相と、それらを除いた、文の基本的な意味内容である Proposition (命題) とに書き換えられる。Fillmore の考え方の特徴は、文の基本的な部分である Proposition を、動詞と、その動詞に対して名詞がもつ格関係とで構成しているところにある。

(8) P \longrightarrow V + C₁ + C₂ + …… + C_n

(6)のタイプの書き換え規則では、さまざまな基底文の文型をカバーするために、形容詞や前置詞句を入れるのに対して、Fillmore の書き換え規則の中心部分は、(7)と(8)である、と言ってよい。C は NP が動詞に対してもつ格関係を表し、付けた番号は、異なる格を指している。これらの深層格には、Agent, Instrumental, Dative, Objective, Locative などがあり、英語の場合、名詞の格を表す役目は前置詞が受け持つ。

(9) C \longrightarrow K + NP

K は、その格に固有の前置詞のことで、例えば、Agent は by, Dative は to, Objective は \emptyset の前置詞をとる。即ち、すべての NP は深層構造において前置詞を持つ、と考えるのである。その結果、異なるタイプの言語、例えば英語と日本語、の基本構造を対称的な形で、提示することができる。

英語は、動詞が先行するタイプの言語で、

P \longrightarrow V + C₁ + C₂ + …… + C_n

C \longrightarrow K + NP

名詞が動詞に対してもつ関係を示す K は、名詞の前にくる。

一方日本語は、

P \longrightarrow C₁ + C₂ + …… + C_n + V

C \longrightarrow NP + K

動詞が最後にくるタイプで、動詞に対する関係を示す K は (て, に, を, は, 等名詞につく助詞で) 名詞の後にくる。

この二つの言語の P, C を比較すると、ちょうど、鏡に映して見る関係であることがわかる。

当然、この P は、文の基本構造であるから、英語の場合、表層構造を導くためには、Cの中から一つを選んでそれを V の左側へ移動させる^②こと、及び、すべての C は、K + NP で、前置詞 K をもつので、主語と目的語になった NP については K を取り除くこと、の二つの手順を取らなければならない。

4. 動詞の Case Frame

先に述べたように、(1)~(4)の John, the door, this key は文中の位置に関わりなく、それぞれの格は Agent, Objective, Instrumental である。

- (1) John opened the door.
- (2) The door was opened by John.
- (3) This key opened the door.
- (4) John opened the door with this key.

次の例でも同様である。

- (10) The door opened.

動詞 open による、この五つの文には共通して、開くもの the door がある。これは、open が、Objective case を必ず取り、Agent と Instrumental case については、任意であるということである。このことを表記しているのが、動詞の case frame で、open の case frame は、[___ Obj (Inst) (Agent)] と表す。

言い換えれば、文の Proposition の内容は、動詞と格であるから、一つ一つの動詞は、共起する格をみれば、その意味上、統語上の特性を知

ることができる。

意味上、というのは、例えば、die, kill, murder の case frame を比較すると、

- (1) die : [___ Dative]
- (2) kill : [___ Dative (Inst) Agent]
- (3) murder : [___ Dative (Inst) Agent]

この三つの case frame に共通する格といえば Dative case (即ち、その動作を被る人)がある。そして各動詞によって選択自由な格 (Agent 即ち、その動作を起こさせる人、また手段としての道具 Instrumental case) とそれらの組合せを、比べることによって、三つの動詞の間の意味上の特性を把握することができる。

また、統語上というのは、格の中の一つが主語になるのであるから、case frame の中に格が一つだけあれば、その格が主語になり、その動詞は自動詞である。他動詞は、case frame の中に二つ以上の格をとることになる。(11)~(13)の case frame は、自動詞 die と他動詞 kill, murder の区別も表しているのである。さらに、同じ動詞が自動詞にも、他動詞にも使われることがあることを、一つの case frame によって——例えば、先の open の例でみるように、一つの格以外は、割弧に入れることによって [___ Obj (Inst) (Agent)] ——表すことができる。

5. Perspective

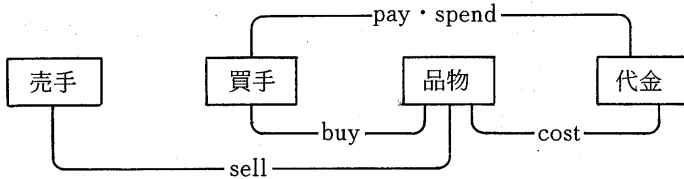
品物を売買する場面には、ふつう、(a)売手 (b)買手 (c)品物 (d)代金の四つが関与する。これらを文で伝える時に、四つの項をみな言い表わす文(14)もあれば、その一部だけを伝える文(15)~(18)もある。

- (14) Mary bought a dozen flowers from Harry for five dollars.
- (15) Mary bought a dozen flowers.

- (16) Mary paid five dollars.
 (17) Harry sold a dozen flowers.
 (18) The dozen flowers cost five dollars.

即ち、同一の場面でも、言語で表現する際は、視点の置き方によって、(a)~(d)四つの項目の内から買手と品物(15)、買手と代金(16)、売手と品物(17)、品物と代金(18)が、それぞれ選ばれる。

その選択は、buy (15), pay (16), sell (17), cost (18)の動詞にかかっているのである。これを図で示すと、



即ち、各動詞は、それぞれ固有の項目の組合せを指定するのである。このように、場面の項目を見渡す視点を、動詞に置いて、視界を主語と目的語の位置にくるものに限ってみたのが、Fillmoreの考えているPerspectiveである、といってよい。このPerspectiveを、主語と目的語の位置に限って考えるのには、次のような理由がある。

同じ深層格であっても、主語或いは目的語の位置にくる場合と、そうでない場合とでは、文の意味に相異が出てくる。次の(a)(b)を比較してみよう。

- (19) (a) Bees are swarming in the garden.
 (b) The garden is swarming with bees.
 (20) (a) He smeared the paint on the wall.
 (b) He smeared the wall with paint.
 (21) (a) I loaded hay onto the truck.

(b) I loaded the truck with hay.

(a) He read from the paper.

(b) He read the paper.

(19)~(21)の the garden, the wall, the truck の深層格は, (a)(b)いづれの文においても, Locality である。しかし, (a)の文では前置詞がとれて, the garden は主語, the wall と the truck は目的語になる。この場合, よく知られているとおり, (a)の文にはないが(b)の文には, 「庭中」「壁全体」「トラックに山積み」の意味がある。これは, Locality が「その場所全体」の意味をもつために, 格を表わす前置詞を落して主語或いは目的語の位置にくるのである, と考えることができる。このような考え方は, 意味に基づいているために, 主語・目的語の位置にくることを, 特に, Perspective に入るといふ言い方をするのである。

(22)についてみると, (a)の文では the paper は Perspective に入っていない。文の意味は, その論文から一部を読み上げる, である。これに対して(b)の文は, 論文全体を読み上げる, となる。

同じ格の NP が Perspective に入る場合は, 入らない場合にはない意味をもつことを見てきた。(19)~(22)に共通しているのは, Perspective に入っている the garden, the wall, the truck, the paper が, 「その全体」Totality を意味の中を含むということである。Totality のほかに, Fillmore は, Humanness と Change of state を挙げて, これら三つを Saliency hierarchy の目安とした。即ち, Totality, Humanness, 或いは, Change of state の意味をもつ NP は, 持たない NP に対して Saliency が大きい, それで当然 Perspective に入ると考えたのである。

Humanness と Change of state については次の例がある。

(23) (a) John hit Harry with the stick.

(b) John hit the stick against Harry.

(24) (a) John knocked on the door.

- (b) John knocked the door down.
 (25) (a) John pushed against the table.
 (b) John pushed the table.

(23)の Harry と the stick の場合、人である Harry と、物である the stick の Saliency hierarchy は、Harry > the stick の関係である。この関係に従って、(a)の文では Harry が、Perspectiveに入っている。一方、この関係を無視して、the stickの方が Perspectiveに入っている(b)の文には、本来 Humanness の Saliency によって Perspectiveに入るはずの Harry を、その位置から外した結果、この文の中では、Harry は人としてよりは、物のように扱われているという意味が出てくる。

即ち、John hit the stick against Harry の Harry は、John hit the stick against the wall の the wall と同じ扱いを受けていることになる。

(24) (25) は、状態の変化・運動を伴う Saliency をもつ例で、(b)の the door, the table は、(a)の場合に比べて、knock, push の動詞の動作の結果、「倒れる」「動く」の変化を伴うのである。

6. 結び

意味の側からは、Saliency hierarchy によって Perspective に入るものが指定される。これは、統語上の関係に、意味の側からの関わり方を説明している。

場面に関与するものの役割を分析^⑤することによって深層格が与えられる。格どうしの間には、Case hierarchy があり、ある格は、他の格に優先して、主語になる^⑥。

そこで二つの hierarchy が、共に統語上の関係を指定するのに与ることになる。

Fillmore は、'68年に提案した動詞の case frame との関係については、

何もふれていない。それを関連づけて、全体の概略は次のようになる。

言語表現の前提となる場面に関与するもの^⑦の役割分析を行って、深層格が与えられる。その場面を眺める視点となる動詞が、その動詞の指定する case frame を与える。

Case frame が与えられることによって、場面に関与するものの極く一部が、文の基本構造を構成する格として選ばれる。その格の間の Saliency hierarchy が Perspective に入る格——主語あるいは目的語の位置にくることのできる格——を選別する。しかし、具体的な統語上の資格——そのうちのどれが主語か、目的語か——は Case hierarchy が決定する。

以上、Fillmore の主張に沿って考えてきたが、不明の点もいくつかある。その一つは、Saliency hierarchy によって Perspective に入る NP が選ばれるとしても、果して逆は真であるか。即ち、Perspective に入っている NP はみな、Saliency をもつと考えてよいか。

注

- ① Chomsky-adjunction
- ② Subject-fronting
- ③ 重なり合った割弧は、いずれか一方を必ず選択することを示す。
- ④ 視点という考え方を Fillmore は持っていない。これは筆者の提案である。
- ⑤ 具体的な基準は明確ではない。例えば Objective case は最も neutral case というが、何が neutral であるのか。
- ⑥ 例えば、Proposition の中に二つ以上の格がある時、その格の一つが Agent case であれば、これが他の格に優先して主語になる。
- ⑦ 場面に関与するものとは、この場合、NP で表わすことの出来るもの。

References :

- Allwood, Anderson, Dahl (1977) , Logic in Linguistics Cambridge University Press.
- Brown, E.K. and Miller, J.E. (1982), Syntax : Generative Grammar, Hutchinson University Library.
- Fillmore, C.J. (1968), 'The Case for Case,' in E. Bach and R.T. Harms (eds.), Universals in Linguistic Theory, Holt, Rinehart & Winston.
- (1977) 'The Case for Case Reopened,' in Cole and Sadock (eds.) Syntax and Semantics 8.
- Lakoff, G. (1970) Irregularity in Syntax, Holt, Rinehart and Winston.
- Radford, A. (1981) Transformational Syntax, Cambridge University Press.